

メッセージアウトライン

ヨハネ11：17～27「知識から信仰へ」

イエスと弟子たちがベタニヤのマルタとマリヤの家に行ってみると、すでにラザロは死んで墓の中に入れており四日もたっていた。(17) ベタニヤはエルサレムの南東約3kmほどの村。(18) 大ぜいの人々がマルタとマリヤを慰めるために訪れていた。(19) 「マルタは、イエスが来られたと聞いて迎えに行った。マリヤは家ですわっていた」(20)二人の性格は対照的であった。→ルカ10:38~42

「主よ。もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかつたでしょうに」(21) 彼女はまだイエスが死人をよみがえらせる力のあることを知らない。

彼女はイエスが神にお求めになること、願うことは、何でも神がお与えになることを知っていると言った。(22) これはイエスが神であり全能だからどんなことでもできるというのではなく、「あなたが神にお求めになることは何でも」とあるように、イエスはなにか神に私たち人間の願い事を取り次いでくださるところの仲立ちというような位置づけとなっている。しかも彼女は、「今でも私は知っております」と言ったように、これらのことを知っている、単に頭の中で理解しているということで、まださらなる段階には進んでいない。イエスは彼女を励まして、彼女が最も願っていたことをズバリと言われた。「あなたの兄弟はよみがえります」(23)

しかし、マルタはこのイエスのことばを、当時のユダヤ人たちが旧約聖書によって理解していた「終わりの日」、すなわち神が世の終わりの時に善人も悪人もすべての人をよみがえらせる、その復活のことだと思った。→ダニエル12:2 ここでも彼女は、「知っております」と、それが単なる知識であることを示している。

イエスは言われた。「わたしはよみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです」。(25) イエスはご自分が人をよみがえらせ、新しいいのちを与える力を持ったお方であるということをご自分で言われている。それは単に死人が息を吹き返すということ以上に、死んでいた者が新しいいのちを持ってよみがえるということである。

聖書によればアダムとエバが罪を犯して以来、すべての人が神の前に死んでいる。→ヘブライ2:1~2しかし、イエスを信じ、神を信じる者は新しいいのち、永遠のいのちを持つことができるのである。→ヨハネ5:24~25 この新しいいのちは、「生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことがない」といういのちである。それはこの地上で何百年、何千年たっても死なないということではなく、罪の結果としての神のさばきを受けて永遠の滅びに行ってしまうのを避ける。逆に永遠のいのちをいただいて神と共に永遠に生きることができるという意味である。→ローマ6:23 もちろんそこにも「わたしを信じる者は」とイエスはご自身に対する知識ではなく信仰を要求しておられる。イエスはマルタに、「このことを信じますか」と言われた。これは単なる知識から信仰へ進むための大切な質問である。「知っていますか」ではなく「信じますか」なのである。彼女はこの重大な真理を十分理解したわけではなかったかもしれないが、すばらしい信仰告白をすることができた。(27) 私たちも単なる知識だけではなく、私たちが愛し私たちの罪の贖いのために十字架にかかれ、死んでよみがえられたまことの救い主イエス・キリストに心からの信仰をもって従う者になりたい。